

◆俳句

段丘の上の母校

桑の実や少年の日にいくさあり

陽炎やいつか来た道また歩む

段丘の上の母校や風薫る

天皇の蓬髪ことに合歡の花

点滴を連れて窓辺の冬銀河

稲垣隆俊 (中43回)

●いながき・たかとし

俳号・鷹人(たかひと)。龍江村(現・飯田市)出身。陸士、旧制松本高校、京都大学(法)卒業。協和(現・りそな)銀行を定年後、文部省・通産省の関連会社に向出。俳句「右脳俳句フォーラム サクロの会」を平成5年創立、現在代表。月刊俳誌「サクロ」通巻190号。昭和15〜18年の「俳句弾圧事件」に遭遇した俳人たちの鎮魂碑を上田市無言館に建立する運動に賛同している。

草餅

母ありしころ草餅に草の筋

呼びに来し子も母許に草を引く

村が見ゆ柿かがやける生家見ゆ

ぼろ市に通ふ故山にまみえむと

繭玉と粗朶そだの跳ね火とひかりあふ

長沼末廣 (中47回)

●ながぬま・すえひろ

俳号・長沼ひろ志。竜丘村(現・飯田市)出身。中央大学法学部卒業。同大学勤務を経て、平成7年より俳誌「秋」主宰。石原八東に師事、現在同人。著書に『私立大学のマネジメント』(日本私立大学連盟編・共著・第二法規)、句集『十子』(「秋」叢書)、合同句集『現代名句集選二〇一〇』(北溟社)がある。

林檎

帰省きせいし子のはや裏山に登りしよ

段丘の背の山なみや夕蜻蛉ゆふとんぼ

林檎りんご挽もぐ一天ひか達たかき信濃かな

月涼し木曾に地酒ななわらひの七笑

東京に棲めど旅びと林檎に刃

古畑恒雄 (高3回)

●ふるはた・つねお

俳号・歌一郎。飯田市出身。俳句結社「岳」同人。現代俳句協会会員。句集に『林檎童子』(角川学芸出版・平成26年)私の俳句の原点は郷里信濃の山河にある。掲句はいずれも郷里に深い思いを馳せたもの。とりわけ、最後の句は、終の住処である東京に暮らす自らを、なおかつ「旅びと」と表現してみた。一句に籠めた漂泊の思いは深い。